

「自信をもって発想する児童」と家庭における造形経験

— 幼児期・児童期の造形活動を保護者はどのように支えてきたか —

坂本 晶

Children who are engaged in art and design activities spontaneously and enthusiastically and their experiences of arts at home - How have parents supported children's artistic activities in their infancy and childhood? -

Aki SAKAMOTO

Abstract

What kind of experiences have children who are engaged in art and design activities spontaneously and enthusiastically gone through in their development? The author asked two pairs of children and their parents who were known to the author to be confident in their ideas in elementary school arts and crafts classes what were the sources of their ideas in their early childhood and childhood experiences, and how they supported their children's art activities as parents. By finding commonalities, we sought to understand how to become a person who supports children's art activities (as a teacher, nursery school teacher, etc.)

Key words : Experiences of arts at home Acceptance and support of arts activities

1. はじめに

小学校図画工作科の授業において、多くの児童は自分でやりたいことを見つけ、試行錯誤しながら自分の発想を追求している。教師は授業の準備を整え、導入で題材について伝え、児童の活動を見守り、一人一人と対話しつつ指導や支援を行い、授業後に児童の振り返りを読みコメントを入れる、などという形で児童の造形活動に関わる。小学校教員だった私も、表し方について悩んでいる児童にアドバイスし、児童の発想を認める、など発想に関わる支援もしていたが、「何も思い浮かばない」様子の児童は稀であった。もしそのような児童がいても、少し対話をしているうちに手が動いたり、周りの児童の様子からヒントを得ていったりすることが多かった。

だが、平成24・25年度小学校学習指導要領実施状況調査に問題作成・結果分析委員としてかかわった際、全国の抽出校で行われた図画工作科の実技ペーパーテストで「想像したことから表したいことを見付けて表すこと（表現の始まりにおける発想や構想の能力）」についてとらえる問題の通過率は79.7%（通過できない児童が20.3%）であった。調査結果の概要にはこの項目が「課題があると考えられる」項目であると記されている。ふだんの図画工作科の授業とは異なる形式ではあるが、指示などは平易であり難しいとは思えない課題で行われた調査であるのに、白紙のまま、あるいは描いたものを消したあとのある解答用紙を見て、非常に寂しい気持ちになった。「想像したことから表したいことを見付けて表すこと」に自信がない、あるいは

表したいことが見付けられない児童が10人に2人程度存在するならば、35人学級には7人存在することになる。これはかなり多いと言えるのではないか。

図画工作科においては、「自らすすんで表したいことを見付ける児童」、つまり、「自信をもって発想する児童」を育てていくことが非常に大切であると思う。自分の発想を基に表現した作品は見ていて楽しく、魅力的であるし、児童自身が造形表現を通して自分が好きなもの、興味があることなどを確かめていくことにもつながると思われる。「こんなことがしたい」という発想があるからこそ、試行錯誤が生まれ、失敗もありながらそれを克服していき、問題解決能力も育っていく。

「自信をもって発想する児童」はどのように発想し、また保護者は児童の造形活動をどのように受けとめているのだろうか。おそらく、家庭における造形経験が影響しているものと予想される。本研究では「自信をもって発想する児童」とその保護者に焦点を当て、「自信をもって発想する」ことを支える家庭での造形経験について考えてみたい。

2. 目的

この研究は、図画工作科において「自信をもって表したいことを見つけて表す」ことができる児童（以後は「自信をもって発想する児童」と表記する）の家庭での造形にかかわる環境・経験の一端を明らかにすることを目的とする。

「自信をもって発想する」児童2名の図画工作科での発想の特徴に触れ、それぞれが幼児期・児童期の家庭での造形経験・人的環境について、児童と保護者の双方から振り返ってもらい、その共通点から、どのような家庭での造形経験が「自信をもって発想する」ことにつながるのか考えてみたい。こどもと造形活動を行う指導者（保育士・幼稚園教員・小学校教員）の指導支援の態度がどのようにあるべきかについてのヒントとなると考えられる。

3. 先行研究

高橋³⁾は保護者の望ましい態度として、造形的好みの

形成、作る楽しさの共有、感動体験の自己表出の3点を挙げている。また中澤ら⁴⁾は芸術活動の熟達者は非熟達者に比べ物理的・人的に豊かな環境にいたようであり、幼少期の芸術活動経験の違いがその後の熟達に影響を与えている可能性を示唆している。また家族以外との芸術活動に携わる人との関わりも芸術活動の熟達に影響していることに言及している。

4. 「自信をもって発想する児童」とその保護者の小学校図画工作科に関する意識

①対象

千葉県内の公立小学校に在籍したA児（男児・質問紙記入時第6学年）及びその父と、同小学校に在籍した児童B児（女児・質問紙記入時第6学年）とその母を対象とした。

対象児童2名は学級（小学校第3学年～第4学年当時筆者が担任した）の中で、図画工作科の授業において「自信をもって発想する児童」であった。筆者のみがそう感じたのではなく、前学年を担当した教員からも、それぞれ「造形表現が得意である」と申し送りがあった児童である。

2名の児童の保護者は双方とも造形関係の職業に就いている。A児の父親はイラストレーター、B児の母親は絵画講師である。双方とも個人面談等において子どもの造形活動に関心を寄せている様子があり、家庭でも造形活動にまつわる経験が豊かになされていることが予想されたため、この2組の児童と保護者に協力を仰ぐこととした。

②方法

主に質問紙調査による。担任として受けもっていた当時の図画工作科授業における造形活動の様子の観察や、質問紙の回答を受けてさらに尋ねたことも記述しているが、質問紙調査以外のことを記述する際はその旨を記入した。

③実施時期

質問紙調査は令和4年3月のA児・B児の小学校第6学年時に回答を依頼した。観察は、担任した平成31年4月～令和2年3月の児童2名が小学校第3学年の授

業内で行った。

④質問内容と回答

児童・保護者の意識を問う質問（図画工作科に対する意識・発想についての意識）の回答には5つの選択肢に○を付けて（例「そう思う・どちらかといえばそう思う・どちらかといえばそう思わない・わからない」）その理由を記述するよう依頼した。保護者に対する「家庭での造形経験」、それぞれの児童の「発想の特徴」については記述式で回答を求めた。スペースの関係で一部の項目は取り上げられなかったが、取り上げた項目については、児童及び保護者の記述のままで回答を掲載した。（但し氏名がわかるような記述は○○に置き換えた。）

ア. 図画工作科に対する児童の意識

A児、B児ともに「図画工作科の授業が好きでしたか」という質問に「そう思う（5）」と答えており、A児は「自由にのびのびと工作や絵をかいったりできたから」とその理由を述べている。（B児の理由の記述は空欄である。）

「図画工作科の学習が普段の生活や社会で役立つと思いますか」という質問に対しては2名とも「そう思う（5）」と答えている。

「図画工作科の授業で行う活動はどのくらいできますか」という質問に対しては2名とも「だいたいできる（4）」と答えている。

「図画工作科を学習して発想することがよくできるようになったと思いますか」という質問に対しては、A児は「そう思う（5）」を選択し、「絵を描くときにポンポンアイデアがうかんでくるから。」と答えている。B児は「どちらかといえばそう思う（4）」を選択し、「友達の作品を見て自分では思いつかなかった考え方を知ることができたからです。」と答えている。

A児の答えからは発想に対する自信がうかがえる。B児は他者の作品と自分の作品の違いからさらに学ぶことができると感じているようだ。他者と自分の違いを認めることは、学校で学ぶことのメリットのなかでも重要なものだとも筆者も考える。

イ. 発想についての児童の意識と特徴

「絵や工作などで『これをかこう！つくろう！』と発想のもとになったのはどんなことですか」という質問に対して、A児は「映画やまんが、お父さんの絵、テレビ、など」と答えている。B児は「小さな頃から山登りをしていて、たくさん自然に触れていたことです。絵本で本をよく読んでいてその作品の内容を思い出しながらつくることがあります。」と記述している。

A児については様々なメディアのほか、保護者の絵から発想を得ているというのが特徴的である。B児は自然体験と読書体験を挙げているが、イメージの源として直接体験や間接体験が造形体験につながることを児童自身が捉えていることがわかる。

『『材料』や『道具』、『友達や家族、先生等の人とのかかわり』から活動を思いつきますか。』という質問に対しては、A児は「人とのかかわり」が「ほとんどの場合思いつく（4）」、「材料」や「道具」は「半々ぐらいである（3）」と答えている。B児は「材料」や「道具」、「人とのかかわり」のいずれについても同様に「どちらかといえばそう思う（4）」と答えている。

「作品をつくりながら思いついたことを他の作品に生かすことがありますか」という質問に対してA児は「そう思う（5）」と答え、「にじいろをほかの作品に入れたり、きょうりゅうも使ったりした。○○○マーク（A児の名前）覚えてます？」と記述している。B児は「どちらかといえばそう思う（4）」と答え、「家で写真立てに貝がらやボタン、ビーズ、などさまざまな素材をつけてアレンジしたことがあって、学校で紙粘土でつくった入れ物をアレンジする時に、貝やシーグラスを埋め込んだりした覚えがあります。」と答えている。

「かいたりつくったりするとき時間を忘れて夢中になることがありますか。」という質問に対しては、A児は「どちらかといえばそう思う（4）」と答えている。B児は「そう思う（5）」と答えている。

造形活動の見取りによる児童の発想の特徴（活動の特徴の見取りと記述は筆者。小学校第3学年当時の様子）と発想の特徴についての質問紙の回答（回答は第

6学年時の児童)

A児の発想の特徴は、ひとつの作品をつくりながら得た発想を、次の作品にうまく生かしていくことだ。繰り返し恐竜をモチーフとして使っていることが象徴的な例である。ほかにも、一つの作品で虹色を使ってみた後に次の作品でも同じ色合いを違う形に使っていくなど、一つの取り組みで得たことを次の作品に生かしているようだと言われている。

前述の「作品をつくりながら思いついたことを、他の作品に活かすことがありますか」という質問に対して、「にじいろをまたほかの作品に入れたり、きょうりゅうも使ったりした。〇〇〇(A児の名前)マーク覚えてますか?」という回答があった。この回答の前半からA児自身が自分の発想の特徴を自覚していることがわかった。前の作品で思いついた虹色を使った着彩を次の作品でも意識して用いている。〇〇〇マークとは笑顔のマークであり、彼の絵の中にときどき小さく描かれていた。このような遊び心が見受けられることもA児の発想の特徴である。

また恐竜がモチーフとしてよく登場するのもA児の特徴である。第3学年のころだけでも作品に3回恐竜が登場している(A児の作品1・2・3)。A児は4歳ごろから調査時まで、機会あるごとに恐竜を描いているという。「作品1・2ではどちらが描いていて楽しかったか」という質問に対して「2。きょうりゅうが好きだから。かっこいいから。自分が好きなものやかっこいいものをかいていると楽しかったり完成に近づくとつれてワクワクしたりする。」という記述があった。

同じものを描き続けていると「何を描こうか」という発想の段階を省略することが可能になり、「何を描こうか」と考えずに「どのような恐竜を描こうか」と詳細な発想の段階に入っていくことができる。描きなれることで恐竜を描くことが、より楽しくなるのかもしれない。虹色に塗り分ける工夫を別題材で行ったのち、恐竜の絵で再度行っていたが、これは「どのように着彩しようか」という段階の構想を省略することになり、他の部分について細かなところまでイメージを広げる余裕をつくることにつながっているように思われる。

「前の絵で使った色を覚えていて次の絵でも意識して使ってみたのだとしたら、もう一度使ってみたわけを教えてください。」という質問に対しては「きれいなにじ色だとなんか強いとか特別とかそういうすごい感じがでると思ったから。」とA児は答えている。

別題材で虹色を使ったことで得たイメージが気に入ったので、意識して好きな恐竜の着彩に生かしているのである。うまくいった方法を次にまた使っている。学んだことを次にいかしながら、中学年の児童としては非常にスマートに発想をすすめていたといえるであろう。



A児の作品1



A児の作品2



A児の作品3

B児の発想の特徴は、イメージに広がりがあり、細部にわたって工夫をこらすということだ。コラージュの作品（B児の作品1）では、たくさんの身近材を家から持ってきて、いろいろな材料を駆使しながら作品をつくっていた。普段から、材料として使えそうなものを集めて保管しているようだ。この作品をつくっているときは、材料を友達が借りに来ると「どうぞ」と応じるものの、その瞬間も作品から目を離さず集中してつくっていた。

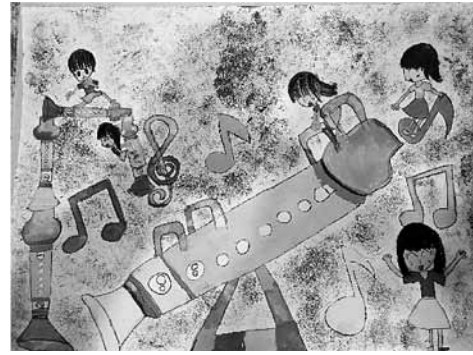
木で作った作品（B児の作品3）については4枚の板の向きを少しずつ回転させてずらしながら重ねるなど、3年生としてはかなり繊細に工夫を凝らしていると感じる。この作品の題名を「神様のところに行ける門」としており、題名の由来についてB児は、「本などでよく門が出てくるのでそのイメージもあって作りやすかったのかもしれない。」と振り返っている。

作品によってモチーフは全く異なり、前述のアンケートで自然体験や読書体験から発想すると答えているB児は、多様なイメージの中から選択して発想しているように思う。

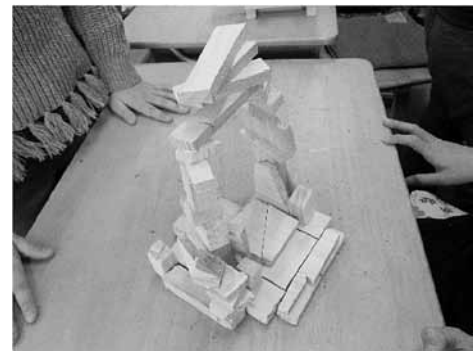
B児が図画工作科の時間に集中して取り組んでいる様子や、細かく多彩な工夫をしている様子は周りの児童に「Bちゃん（の作品が）すごいことになっている！見て！」と言わしめるほどであった。自信をもって発想するだけではなく、浮かんだイメージを自らの手で色や形にし、それをまた作りかえながら納得のいくまで表現を工夫するのがB児の特徴であると思う。また、作品のどこかが突出して目立つのではなく、全体的に調和している。イメージは細部までかなり詳細に浮かんでおり、手を動かしていかにそれに近づけるか検討し続けることもB児の特徴であるように感じる。



B児の作品1



B児の作品2



B児の作品3

ウ. 児童の図画工作科における活動に対する保護者の意識

「図画工作科の学習が普段の生活や社会で役立つと思いますか」という質問に対して、A児の父親は「どちらかといえばそう思う（4）」と答え、以下のように述べている。「学校では夏休みのしおりみたいなものに挿絵を描いたり家では弟たちに絵を描いたりしているようです。」B児の母親は「そう思う（5）」と答え、以下のように述べている。「子どもが成長するうえで経験すべきことが含まれていると思います。自分の好きなことに対して想像力をふくらませ、試行錯誤したり取捨選択したりする経験は子どもの成長に必要なだと思います。」

「授業で行う活動はどのくらいできていると思いますか」という質問に対して、A児の父親は「だいたいできる（4）」と答え、「評価はわかりませんが、だいたい楽しんで取り組んでいます。」とコメントしている。B児の母親は同じ質問に対して「よくできる（5）」と答え、以下のように述べている。「工作は自分の思ったようにできなかった、と言っていることが何度

かありました。ただし、親の目から見てよくできていると感心することが多かったです。次にどんな作品を作ってくるか楽しみだったことを記憶しています。」

「お子さんが描いたりつくったりした作品を見せに来た時どのような話をしましたか」という児童の作品の受け止め方についての質問について、A児の父親は、「よくできたところを褒める、完成させたことを褒める、子どもの話をよく聴く、努力したところを見つける（選択式・複数選択可）」といった点を意識していると答え、次のように述べている。

「とにかく創り上げることが素晴らしいので、まず褒めます。それは本心です。そして本当に気になる部分があれば、それも言います。否定しないように。」

B児の母親は「よくできたところを褒める、どのようにしてつくったり描いたりしたのかプロセスについて聴く、子どもの話をよく聴く（選択式・複数選択可）ことを意識している」と答え、次のように述べている。

「技術的な事など絵について教えたことはほとんどありません。子どもが小さい頃は自由にのびのび描くことが大切だと思っているので、なるべく自分のやっている事に自信をもち、本人が楽しくやれるよう見守る姿勢を心がけました。（口出しすると嫌いにさせてしまうだろうと予測できたため。）」

「創る」ということそのものを大切に考え、完成させたことをともに喜ぶこと、自分の活動に自信をもつてのびのび楽しくできるように本人のやり方を尊重することが2名のコメントにそれぞれつづられている。子どもの気持ちに正対しながら、言葉を選んで、自信をもって造形活動に児童が取り組むことができるように表現を受け止めていることがわかる。

エ. 発想についての保護者の意識

「図画工作科を学習して発想することがよくできるようになると思えますか」という質問に対し、A児の父親は「そう思う（5）」と答えている。

「お子さんが絵や工作で『これを描こう！つくろう！』と発想するもことになることはどんなことだと思いますか。」という質問に対しては、「アニメや映画のキャラ

クターを模写するよりも、図鑑に出てくるモンスターや恐竜など迫力あるイラストに影響を受けていることが、今（小学校卒業時）は多い気がします」と述べている。A児はリアルな描写を目指している時期なのであろう。なお、A児は発想のもととして「映画やまんが、お父さんの絵、テレビ」を挙げていたので、A児の父親は意識していなくても、A児は父親の作品の影響を受けていると思われる。担任していた当時、A児が、A児の父親の手がけたイラストのついたバンダナを「先生見て。これはお父さんが描いた絵がついているんだよ。」と嬉しそうに見せてくれたことがある。タレントの似顔絵を模様のようにちりばめたもので、一緒に見ていた友達も「〇〇でしょ。すぐわかる。いろんな顔(表情)が描けていてすごいね。」と感心しながら見ていた。また、「うちのお父さんの仕事は…」と誇らしげに話しているのも聞いたことがあるのでA児は仕事の様子を見たことはなくてもA児の父親の仕事について誇りに思っていたものと考えられる。このような造形に関係した職業に就いている保護者への尊敬も自信をもって発想するということには影響があると思われる。

「図画工作科を学習して発想することがよくできるようになると思えますか」という質問に対してB児の母親は「どちらかといえばそう思う（4）」と答え、下記のようにコメントしている。

「図画工作科は自分の思い付きや組み合わせ、発想を試せる場所だと思います。発想がよくなるというよりは、自分のなかの好きな感覚や得意なものを知る一つの機会になっていると思います。また、他の子が作る作品に刺激を受けるのもよい経験だと思います。」

「お子さんが絵や工作で『これを描こう！つくろう！』と発想するもことになることはどんなことだと思いますか」という質問に対しては、「今までの経験・感動して心に残った景色・風景・本（絵本）・材料」を発想のもととして例示している。これはB児の答えと合致している。「図画工作科は自分のなかの好きな感覚や得意なものを知る一つの機会になっている。」というB児の母の回答は、自分の手で好きなものを好きなように可視

化して表す、という経験が、好きなものを改めて確認する機会となるということなのだ、と筆者は解釈した。そのうえで友達の作品を見ることは、友達をよく知り、自分との違いをとらえることで、自分の世界を広げることができるということなのだろう。前述B児の「友達の作品を見て自分では思いつかなかった考え方を知ることができるからです。」という回答とも重なる。

オ. 家庭での造形経験

【A児の造形経験（A児の父親が回答）】

3歳から就学前までの間の家庭での造形経験として「週に2・3回。好きだったので、ひたすら何かを描いていました。今では3番目（の弟）がお絵描き大好きです。」という回答が得られた。

小学校第1学年から第3学年の間の家庭での造形経験としては、「父親も一緒に、絵しりとりをやったり、紙に指令を書く宝探しゲームをしたり。段ボールでミニカーのコースやトンネル、剣などをつくった気がします。」と記されている。「絵しりとり」について気になったので、追って口頭で尋ねたところ、「渡された絵を見て黙って見た絵の名前の最後の文字が最初に付く言葉を表す絵を描き、また次の人に黙って渡す遊び」であるということであった。描画だけで行うしりとりである。

3年生になるまでの間の保護者の方の仕様の様子（つくる、描くなど）を目にする経験はあったかどうかを聞いたところ「ほとんど見ていません。仕様の様子は見せた記憶はありません。いっしょにいるときに何か描いてあげたりすることはよくあった気がします。」という回答があった。なお、A児がお父さんの作品を私に誇らしげに見せてくれたことがあったことはエで述べたとおりである。

3年生以降の家庭での造形経験として「週に一度ほど。最近では「○○○新聞」という記事とイラストを盛り込んだ新聞を作って見せてくれます。少し前は2番目の弟と共作で3番目の弟が好きな「こびとづかん」のキャラクターを30体くらい紙に描いて切り取り、家じゅうに隠して探す遊びをしてくれました。」と記され

ている。A児の家庭では、A児の父親や2名の弟たちとのコミュニケーションのツールとして絵を用いるということが多くようだ。「絵しりとり」や宝探し、また新聞など見せる前提で描く活動が多い。工作もミニカーのコースやトンネル、剣等、皆で使って遊ぶことが前提のものが多いようである。

【B児の家庭での造形経験（B児の母親が回答）】

0歳から3歳までの間の家庭での造形経験として、「毎日イーゼルの紙にクレヨンでめいっぱい描いていました。絵の具を使う時はなるべく大きな模造紙や画用紙を用意しました。家族間で手紙（絵中心）のやり取りをしていました。（1歳～小学生）手紙は切り絵だったりポップアップする仕掛けがあったり、ちょっとした工夫がありました。」という回答が得られた。

3歳から就学前までの間の家庭での造形経験として、「毎日家のリビングにいつでも絵が描けるようロール紙をつけたイーゼルを置いていました。3歳ごろはほぼ一人で。3歳下の弟が3歳くらいになると、二人で描いていることもありました。カラーペンや色鉛筆などは常に身近なところに置き、いつでもどこでも描けるようにしていました。」と記されている。リビングにイーゼルがあれば、家族が見ることもできるし、子どもがいつでも描画に取り組むことができる。

3年生になるまでの間保護者の方の仕様の様子（つくる、描くなど）を目にすることがあったかという問いについては、「時々見ていました。子どものピアノ発表会の舞台背景にプロジェクターで映し出す絵の連作を頼まれたことがあります。下絵から絵の制作、最終的に舞台に映し出すまでのプロセスを見せることができたのはよかったです。下絵の段階から『この絵好き』と言いながら、となりでじっと見ていたのをよく覚えています。」と回答されている。

3年生になるまでの間の家庭での造形経験として、「自分の制作は主に子どもがいない間に描いていたので一緒に描く機会は少なかったのですが、何かイベントがある場合にいろいろな画材を使って一緒に描くこともありました。年賀状に和紙でにじみ絵を制作したり、

いところ来たときは大きな紙にみんなで描き合って大きな水彩画や絵巻を制作したり。同年代のいとも絵が得意で競い合うように描いていた記憶があります。」と記されている。

Bさんにご自身の作品を見て話すことはあったかという問いに対しては「写実性よりも色彩に目が行くように華やかな絵を好んで、そういった絵にはよい評価をくれました。子どもらしく素直な感想を言ってくれたと思います。(よくできたところ、プロセスなどについて)」と記述されている。

画像が残っているようなら見せていただきたいとお願したところたくさんの画像を提供してくださった。下記に例を掲載する。B児の作品には多くの色彩が用いられ、家の配置も工夫されている様子が見える。母の絵手紙の挿絵は細部まで丁寧に多彩な画材を用いて描かれていることがわかる。



B児2歳4か月



母が描いた絵手紙

5. 考察

A児・B児とも幼少期から絵を好んで描いている。加えて、遊びの道具や、絵手紙、新聞などコミュニケーションのツールとして家族に見てもらえて反応が得られる活動も行っている。また、A児とB児の双方とも、幼児

期から造形表現を生かした遊びに家族で取り組んできたことがわかった。内容的には異なるものであったが、その違いがA児・B児の発想の特徴につながっているように思う。保護者とともに描いたりつくったりする機会が豊かにあり、遊びでありながらレベルが非常に高い(真剣さや意欲が感じられ、造形的に優れている)ことが感じられる。

子どもの発想のもととは何かという質問に対して、A児の父親は「図鑑や本のイラスト」を、B児の母親は「今までの経験・感動して心に残った景色・風景・本(絵本)・材料」を挙げている。そしてこれらはA児・B児それぞれが自ら発想のもととしてあげたものとおおむね一致している。成長の造形表現の過程を、保護者であるA児の父親、B児の母親がしっかりと見つめているということではないだろうか。

そしてそれらは保護者とともに経験したことのなかから「好きなもの」としてA児、B児が自ら選び取ったものなのではないか。自分で選び取ったものだからこそ、意欲もわき、自信をもって発想できるのであろう。佐伯¹⁶⁾はデューイの論を引用しながら「遊び」と「しごと」について、次のように述べている。

「遊び」のなかでも「結果」(あるいは目標)がどうしても気になりだすと、それは「しごと」をするということに、自然に心が向かうでしょう。つまり「しごと心」(本気で探究する気)になるという心のもちよう(態度: attitude)に切り換わるのです。

また「しごと心」は行為の結果(目標)に関心があるのですが、当然それを達成するための手段を探し求めます。手段はさまざまな試みで探し求められるでしょう。手段が見つからない時、あらためて「遊び心」でさまざまな可能性に想像をめぐらせ、目標そのものを修正ないし変更するということになるかもしれません。

デューイはそのような「探究の中の自由な遊び(free play of thought in inquiry)」は、真理の探究には欠かせないこととしています。「しごと」のなかに「遊び心」が入り込んでくることこそが「探究」

の本来の姿だとしているのです。(中略)

「遊びのおもしろさ」をもっと高めようと考え、
「得られる結果」をもっと善いものにしたくなり、自然に「しごと心」になります。(中略) その場合は、「もっとおもしろくするため」あるいは「単なる空想(絵空事)」でなく、「ホンモノの世界に近づく」ために「しごと心」になるのです。(中略)

そのような場合の「しごと」は「まじめさ」のなかにも遊び心の楽しさを伴い、いわば「ワクワク感のあるしごと」になっているでしょう。(後略)

上記の部分を読んで、A児とB児の家庭での造形経験は「探究の中の自由な遊び」であり、熱中しながら「ワクワク感のあるしごと」に取り組んでいたといえるのではないかと考えた。それぞれの家庭で奥行きのあるゆたかな遊びが展開されていたのである。このように親子一緒に遊び(しごと)に取り組むことがA児・B児のしごと心に火をつけ、現在の発想の流暢さや試行錯誤をいとわず取り組む態度に影響を与えていると思われる。

さらに、子どもの表現を受け止めるうえで大切だと思われることが、2人の保護者の意見に共通して記されていた。A児の父親も、B児の母親も、小学校の造形表現活動(図画工作科)に関心もちながらも、子どもの持ち帰ってきた作品について、まずは完成を認める、のびのび活動したことを大事にするなど、作品を肯定的に受け止め、言葉を選んで話をしていることがわかった。これはA児の父親・B児の母親の職業が造形に関わるものであるからこそ、保護者の感想を聴いているA児・B児の造形表現への意欲が失われないように配慮した姿勢である。

6. おわりに

A児とB児及びその保護者の事例において、「自信をもって発想する児童」を支える保護者の意識として、以下の3点が児童に影響を与えていることが考えられる。

1点目は、豊かな体験や好きなものがあるというこ

とが造形活動にいきるということ意識することである。自然体験などの直接体験や、読書などの間接経験が豊かであることが、豊かな発想のもととなることを意識すべきである。このような体験から心に残っているイメージが子どもの発想の素材となることがある。またA児の場合の恐竜のような気に入ったモチーフがあることは、モチーフを選択する負担を軽減し、自分の造形活動での試みを意図的に次の造形活動に活かすことにつながる。

2点目は、ともに、みること・つくることを楽しむということである。A児・B児とも幼少期から絵を好んで描いている。加えて、遊びの道具や、絵手紙、新聞などコミュニケーションのツールとして家族の反応が得られる活動も行っており、遊びでありながら真剣さや意欲が感じられるような「探究的で自由な遊び」と見られる造形経験がなされていた。二人の「自信をもって発想する」子どもは幼児期から、このような造形経験を重ね、発想の流暢さ、広がり、また発想したことを表現するために試行錯誤する態度などを身に付けてきたのであろう。「おもしろさ」をもっと高め、得られる結果を善いものにして子どもが思える造形体験の一つ一つが、「自信をもって発想する」子どもの成長を促すのだと思われる。

3点目は作品を受け止めることで、子どもの造形活動を尊重し、意欲を支えるということである。「子どもの作品を見るときは、とにかくつくり上げることが素晴らしいので、まず本心から褒め、本当に気になる部分があれば、否定しないように言う」というA児の父親。「子どもが小さい頃は自由にのびのび描けることが大切だと思っているので、なるべく自分のやっている事に自信をもち、本人が楽しくやれるよう見守る姿勢を心がけた」というB児の母親。ともに、子どもと作品を大切なものにとらえ、意欲を阻害しない心づかいが感じられる。つくることそのものを大切に、楽しくやれるように見守る姿勢を心がけ、のびのびと取り組んだ作品の完成を受け止めることも、幼児・児童が自信をもって発想することを支える人として大切な心構えとなると考えられる。

今後は「自信をもって発想する学生」などの事例の検証を行い、上記三点について確認しつつ「自信をもって発想する」人を支えるために大切なことを見つけていきたい。

参考文献

- i 国立教育政策研究所 「平成24・25年度 学習指導要領実施状況調査報告書 結果のポイント及び教科等別分析と改善点」2018
- ii 高橋敏之:「幼年期の家庭における造形活動と人的環境としての保護者とのかかわり」『家庭教育研究』、第7号、日本家庭教育学会、2002、p.1-10.
- iii 中澤潤 中道圭人 朝比奈美佳 古賀彩:「芸術活動の熟達者と非熟達者の幼少期の環境の違い」『千葉大学教育学部研究紀要』、第56巻、2008、p.128～130
- iv 佐伯胖:「子どもの遊びを考える:『いいことおもいついた!』からみえてくること」北大路書房 2023、p.180～182